

## 第五編 余 録

本編には錦帯橋の再建工事として直接、間接関係はあるけれ共前各編に於いて記述し得なかつた諸般の出来事の中主なものを集録することにした。

### 一、錦帯橋の再建工事とルース台風の被害

此の再建工事に限らず総て工事には悪天候は禁物である。殊に河川工事に於いて然りとする。錦帯橋が予定よりも早期に完成したことは、種々理由はあつたにしても、結局は工事が好天に恵まれたところに最大の原因があつたといわなければならぬ。

然し二ヶ年余の長期に亘る錦帯橋再建工事が終始好天に幸いされ順調の一途を辿つて来たといふのではない。その間大小幾多の台風にかきされ、洪水に悩まされ殊に昭和二十六年七月十日のケイト台風と同年十月十四日のルース台風によつて工事は相当の打撃を蒙り、一部世人をして錦帯橋の再建果して成るかどうかの疑惑を抱かしたこともあつたのである。同じ台風による被害でもケイト台風の場合は出水量も驚く程のものではなく又工事も橋脚基礎の初期程度に過ぎなかつただけに被害も比較的小さかつたけれどもルース台風による被害は、ひとり錦帯橋工事のみならず広範な錦川流域全般に及び、然かもその深刻なること言語に絶するものがあつた。

何分ルース台風は中心が岩国の上空を通過したことになるので、その風雨の強烈さも錦川の出水量も岩国地方としては未曾有のものであつたから、次に掲載する「ルース台風とその被害状況」の短い記録でも、当時の全貌を知る良い参考資

料ではないかと思う。

(註) 次の記録は錦帯橋建設局が当時監督官庁等に被害状況を報告する為に蒐集した資料及び建設局日誌より抜萃摘録したものである。

### ルース台風とその被害

昭和二十六年十月十二日ルース台風襲来の公算大なりとの報に接して以来錦帯橋建設局としては、工事関係業者をも総動員して能う限りの災害予防対策を講じたが、錦帯橋に於ける量水標(建設局が工事上の必要に基き設置せるもので、平水位を三米四二とす)に於いて最高水位一〇、〇二米(量雨計は三五〇、二ミリを示す)に達する未曾有の大洪水であった為、遂に工事施設の一部に相当の被害を蒙るに至つたことは誠に遺憾であった。

当時は左岸橋台の取除け、第一、二、三、四橋脚井筒工事中であつたが本来の再建工事に被害の少なかったことは不幸中の幸いともいふべきであつた。

#### (1) 気象及び水状に関する情報

- 一、十月十一日午後二時大阪管区気象台よりルース台風発生及び本土接近についての特報発せらる。
- 一、十月十二日正午下関測候所より「台風ルースは九二五耗ボール、沖繩の南七〇〇耗、東径一二八度、北緯二〇度の海上にあり。六乃至七ノットの時速で北西に進んでおり、十三日夕刻沖繩に接近する。
- 一、十三日午前八時より同日夕刻迄に台風の本土襲来は避け難きを思わしむる特報屢々発せらる(気象台、測候所よりの連絡及びラジオ発表)

一、十三日午後六時向道ダムよりダムの水状及び全部開扉実施の旨電話、(御庄村役場経由)あり、開扉の時刻、程度錦川上流の降雨状況不明なるも、岩国の降雨状況より判断し豪雨中の模様。

一、十四日午前八時下関測候所発表

台風は当地方を通過する見込、山口県全域共降雨強くなる。本日昼過ぎより明日夜半にかけて東後西の風で陸上最大風速一〇米乃至一五米、海上二〇米乃至二十五米、今後の雨量は一〇〇乃至一五〇ミリとなるから災害を引き起す恐れあり。

一、十四日午前八時五十分錦帯橋建設局広瀬量水所より「平水より三尺増水す、現在小雨」との電話連絡あり。

(註) 同日午後広瀬量水所との連絡絶ゆ。後に至り広瀬地方は山津波各所に起きて被害多く前記量水所員囑託末岡実は之が為遭難死亡せること判明す。

一、十四日午前九時向道ダムより連絡

現在水位三一六・四五米、降雨量午前零時より九時迄一一五・九ミリ、一時間の増水量一米、門扉下三・五〇米、ダム天端迄九・六〇米。

一、十四日午前十一時向道ダムより連絡

現在水位三一八・一米、降雨量一三一ミリ、門扉下一・九〇米各扉を一米開く。

一、十四日午後二時広島気象台発表

広島県下全般は明朝暴風雨となり最大風速二五米位、降雨は続き総量二〇〇乃至二五〇ミリ位、河川は増水し、低地は浸水、土砂崩壊の虞れあり。

明朝九時三十分満潮時につき、島や沿革に高潮のおそれあるを以って充分警戒を要す。

得たる情報は以上の通り(各所よりの連絡多数あるも大同小異につき省略)であるが、事實は予想よりも早く岩国に襲来し、十四日午後十一時には横山地区は停電、十五日午前二時頃には電話不通となり、建設局と関係方面との連絡は杜絶、孤立の状態となる。

当時の水状は別図水位曲線に示す通りである。

## (2) 防災対策

十月十二日正午の警報に接するや建設局は直ちに非常態勢に入り、工事関係者を招集して協議の上、ケイト台風時の体験を参酌し能う限り被害を僅少ならしむるよう十三日夕刻迄に次の通り工事現場に対する防災手当を実施することにした。

イ 工事場に於ける動力設備その他資材の撤去又は整理。

ロ 左岸橋台の土砂崩壊防止（差当り吹一八〇俵配置）

ハ 第二号橋脚井筒（一〇米沈下終了）の土砂流入による埋没防止（古軌条を充用して井筒口を閉鎖）

ニ 第三号橋脚井筒型枠の流失及び流木による破壊防止（五分ワイヤーに型枠の緊繫、流木回避施設）

ホ 第四号橋脚井筒型枠の流失及び同工事用足場流失防止（五分及び四分ワイヤーによる型枠締付、陸上樹木への結び付け）

十四日早朝より増水急速の度を増し、(ホ)の第四号橋脚井筒工事場に対する手当は既に腰を没する水中での作業であった。

十四日午後八時頃増水の為第四号橋脚井筒工事用足場流失に瀕するに至り、止むなく連繫するミキサ―据付親櫓保全の為之との切離作業を実施す。尙左岸橋台附近岸壁の防護、防水作業は消防団及び一部市民の協力を得て建設局左岸防災作業班之に当り、右岸橋台附近及び千石原に通ずる堤防の防水作業は横山地区市民総出動の応援を得て右岸防災作業班担任し、何れも十五日午前四時錦川減水の徴候を見る迄続行せられた。夜半の二、三時頃は左右兩岸共橋台附近は土のうを築かなければ河水は堤防を超えんとする状態に於つたのである。

## (3) 被害状況

十四日夕刻五時頃以降の増水量は物凄く、水位は未だ三尺の流水に達して、工事施設も水位を未だ三尺に

及び逐次流失損壊を拓くに至り

イ 十四日午後五時三十分には第四号橋脚井筒型枠二〇度左傾。

ロ 同日午後十時十五分第四号橋脚井筒型枠半壊し、締付用四分ワイヤー切断の為同工用足場傾く、同時刻頃建設局前設置量水標流失。

ハ 同十時三十分第二号橋脚井筒工用櫓及び Derrick 崩壊流失。

ニ 同十一時三十五分第一及び第四号橋脚井筒工用櫓（第四号橋脚の分は足場）崩壊流失。

同時に第四号橋脚井筒型枠及び沓鉄流失（沓鉄は愛宕橋右岸橋脚に引懸り停止）

ホ 十五日午前一時五十分第一号橋脚井筒工用 Derrick 倒壊流失。

ヘ 同午前三時五十分第四号橋脚井筒工用親櫓崩壊流失（掘付ミキサーは水没）

その他機器類、レール等土砂埋没せるもの多く、第三号橋脚井筒型枠の崩壊（流失は免る）第一号橋脚井筒土砂流入もあり、事務所、仮橋の損傷を合すれば相当の被害額に達することが予想された。

十五日午前四時頃より漸く減水を始めたが、十四日午後十時より翌朝三時頃迄は家屋其の他の漂流物は夥しく、之等に取廻り助けを呼ぶ必死の人声も屢々聞こえ、全く暗夜の河面は此の世の地獄、阿鼻叫喚の巷を現出し、防災に携わる吾々をして戦慄せしめたものであった。

被害の状況は別図被害状況図に示す通りで、その被害額は調査の結果大約百五十万円に及ぶことになった。

#### (4) 災害復旧対策

イ 第一号橋脚井筒

減水後直ちに Derrick の修復工事に取り掛り、十月二十三日より埋没土砂の取除け後引続き井筒沈下作業に着手。

ロ 第二号橋脚井筒

閉塞した古軌条を撤去し十月十五日本工事に着手す。

ハ 第三号橋脚井筒

第二回目沈下井筒二・八米の型枠及び鉄筋組立施工中崩壊した為十月十八日より工用舟艇を利用して型枠残骸及び鉄筋の引揚げ及び手直し作業に着手。

ニ 第四号橋脚井筒

第一回沈下井筒四・二米型枠、鉄筋組立施工中流失したため、直ちに被害ヶ所の跡片づけ、型枠の製作、鉄筋加工を行う傍、愛宕橋下にある沓鉄の引上分解、運搬後修理を加え、漸く十一月十二日より本工事を続行し得るに至る。

ホ 工用機械器具、仮設備

流失した足場、櫓、飯場等の復旧は十月十八日に着手、概ね十月末日迄に終了、古軌条その他埋没した施設も減水と共に逐次掘り出し、行方不明となつた一部軌条を除き十月二十三日迄に修復。

ヘ 事務所

十九日より暴風雨の為損壊した屋根、窓硝子及び倒壊した便所の修理に着手、二十日終了。

ト 仮橋

ケイト台風の際流失を免れた橋脚杭が殆ど流失した為更に設計を変更して橋長、橋脚高を増し、十月二十三日より架橋に着手、十一月七日竣工。

尙十月十四日午前七時より増水の為休止中の横山、錦見間渡船は十六日正午より再開す。

(5) 錦帯橋建設局の非常態勢と活動

イ 局員の非常配置

十月十二日正午の情報により直ちに局としては防災対策を講ずると共に、出来得る限り工事を促進しておく必要の

あるものは夜間作業を実施せしむることとし、十三日の勤務より局員を二班に分ち二交替制の勤務を採った。然し十五日早朝頃の襲来を予想した台風はその後進行速度を増し、十四日夕刻頃となる懸念を生じたので、同日早朝には帰宅休養中の局員を招集して次の如き任務を定め、非常事態に備えることとなった。

(一) 局本部

品川局長統轄下に

情報係 藤枝吏員、藤川囑託

量水及び連絡係 柳川寿之吏員、吉木事務員、柳川天流生囑託

庶務全般 美川総務課次長

工務全般 中村吏員

(二) 左岸防災作業班

八賀工務課長指揮下に

局側 森岡技術員、三戸事務員

工事請負業者側 八木、村川組五名、日野、妹尾組五名

(三) 右岸防災作業班

品川局長指揮下に

局側 野村技術吏員、水野技術員、久保田傭員

工事請負業者側 日野組四名、吉元組二名

ロ 千石原及び横山地区に対する非常措置

十四日午後十時頃千石原の浸水甚だしく横山地区消防団及び横山振興連盟の青年有志救援作業実施中との報を受け

更に十五日午前一時頃には千石原方面より堤防を越え河水は上口方面に浸入しつつある外、下口方面も溜水、湧水の為漸次増水し舟艇によらなければ交通不可能の所ありとの情報を受く。

午前三時頃錦川本流の水位は河岸スレスレの所に達し殊に錦帯橋左右両橋台附近は地盤稍々低き為堤防欠潰の虞を生じ両岸作業班は消防団、一部市民の協力を得て防水、警戒の任に必死の努力を傾けた。然し横山側は電話不通、停電の為市民の不安愈々深刻なものがあつたので、建設局本部は消防団と協議の上独断にて老幼婦女子に白山神社及び洞泉寺への避難集結を通告すると同時に、旭町居住男子全員を動員して

- (一) 防災用資材（吹、土砂）運搬五名……オート三輪車三台
- (二) 右岸橋台附近防水作業に約二〇名
- (三) 千石原の避難救援に四名
- (四) 萬谷、千石原間堤防の警戒、連絡に五名
- (五) 横山浸水地帯の救援、連絡に若干……舟艇二隻

に区分、夫々防災作業に協力せしめたのである。

是より先、旭町手島正二氏宅に横山地区救済本部が設けられ、建設局の重要書類を同氏宅に移すと共に万一の場合には局本部を同所に移転する準備をも整えていた。

十五日午前四時三十分横山振興連盟会長手島宗二氏より浸水地区市民及び避難者に炊出しを実施せんとする要請があり、局本部は之を諒承し、横山地区各団体の協力によつて十五日朝食より約六八〇人分の給食に当り十六日夕食迄継続した。（但し受給者は減水と共に漸減）

十五日午前七時三十分より約三時間に亘り消防団及び局員二名によつて千石原、横山上口地区、局次長及び局員二名によつて萬谷、下口地区の被害状況調査を施行す。



被害状況についての連絡、報告

十四日夜半よりは電話不通、市内橋梁の流失（普通橋梁は大正橋のみ残存せるも通行危険）等により十六日正午横山、錦見側間渡船開始迄は岩徳線鉄道橋梁によつて対岸との連絡を実施し得るに過ぎなかつた為、各方面への錦帯橋再建工事及び横山地区の被害状況に関する連絡、報告は相当遅延の止むなきに至つたが、

(一) 十五日午前六時、午前十一時の二回建設局の防災処置概要、一般水状、被害状況を市長に速報し、午後一時第一次錦帯橋再建工事被害状況報告書を市長に提出。

(二) 十月十六日工事被害状況報告書（午前八時現在）を来岩中の小沢副知事に提出すると共に、局次長より被害状況を緊急市議会に報告。

建設省及び在京関係有力者に被害僅少の旨を打電報告、建設省山口県宛第一次災害報告書（図面及び写真添附）を発送。

(三) 十月十七日重宗雄三、栗栖利夫、佐藤栄作、青柳一郎、津田彌吉、永田新之允、西村茂生、佐藤、青木両博士に書類を以つて災害状況を報告。

尙錦帯橋再建工事の被害状況を視察又は調査せられた主な人々を列挙すると次の通りである。

視察又は調査月日	職名	氏名
十月十六日	山口県副知事	小沢太郎
同 十七日	建設省防災課技官	樋口哲司
同 二十二日	建設大臣	野田卯一
	山口県知事	田中竜夫
	岩国市嘱託工学博士	佐藤武夫

同

同 二十七日

参議院議員

同 二十八日

文部政務次官

山口県教育長

同 二十九日

建設省河川局長

山口県土木部長

同 三十日

三 笠 官 殿

十一月二十四日

参議員議員

青 木 楠 男

岩 田 仁 蔵 外二名

水 谷 昇

野 村 幸 祐

目 黒 清 雄

永 井 重 雄

三 笠 官 殿 下

菊 山 嘉 男

鮫 島 茂

金 子 源 一 郎

当時に於ける水状及び被害状況に関しては次表参照のこと。

一、ルース台風による水位曲線

一、錦帯橋下水位、水量等曲線

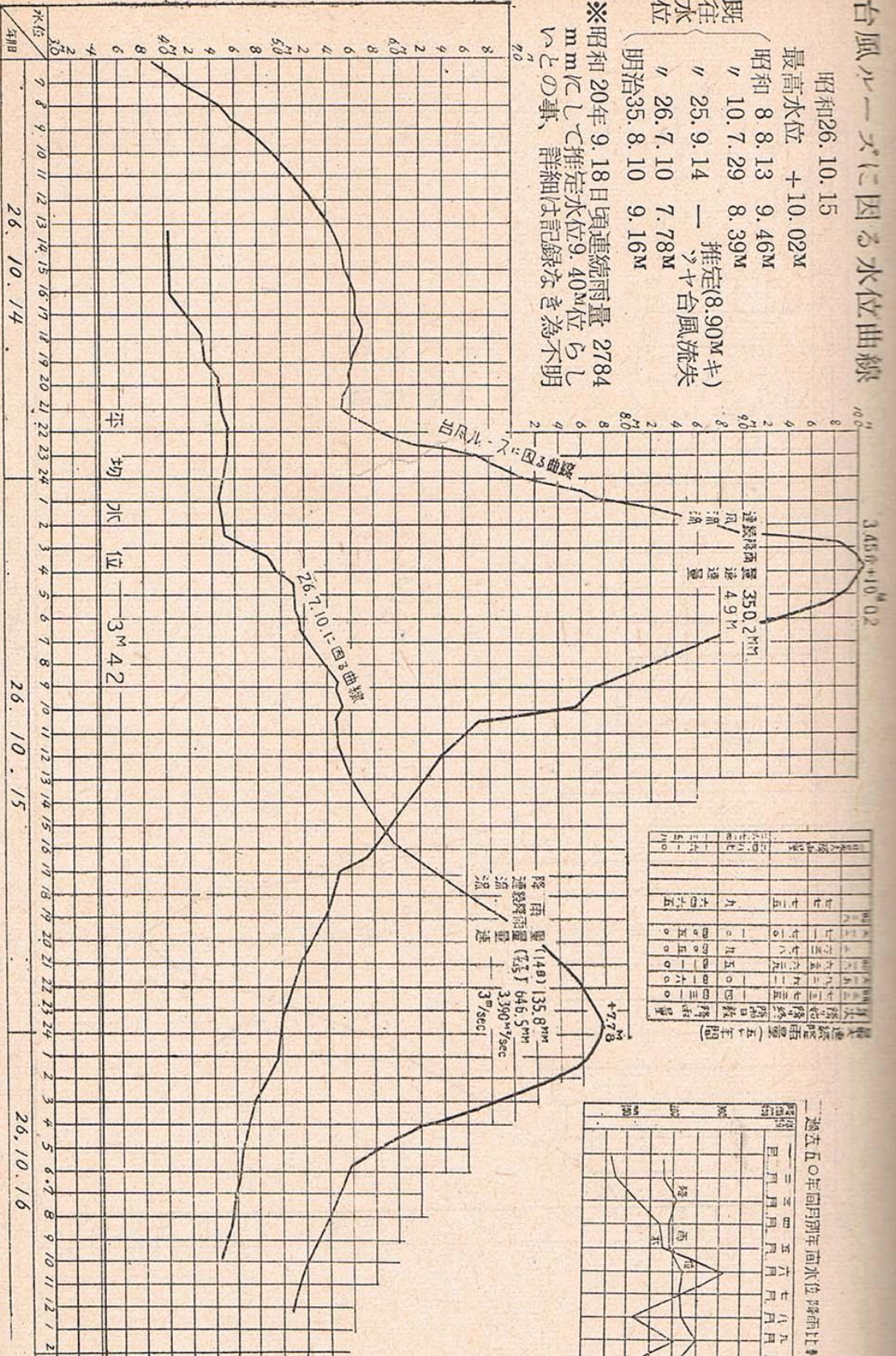
一、同 一覽表

一、ルース台風による工事被害状況図

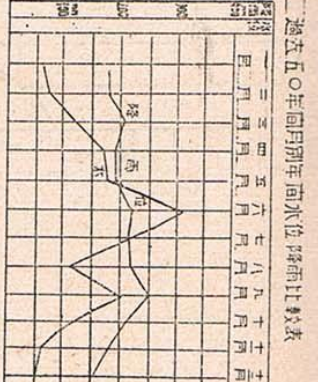
# 台風ルーズに因る水位曲線

昭和26. 10. 15  
 最高水位 +10.02M  
 昭和 8 8. 13 9. 46M  
 " 10. 7. 29 8. 39M  
 " 25. 9. 14 推定(8.90Mキ)  
 " 26. 7. 10 ツヤ台風流失  
 明治35. 8. 10 9. 16M

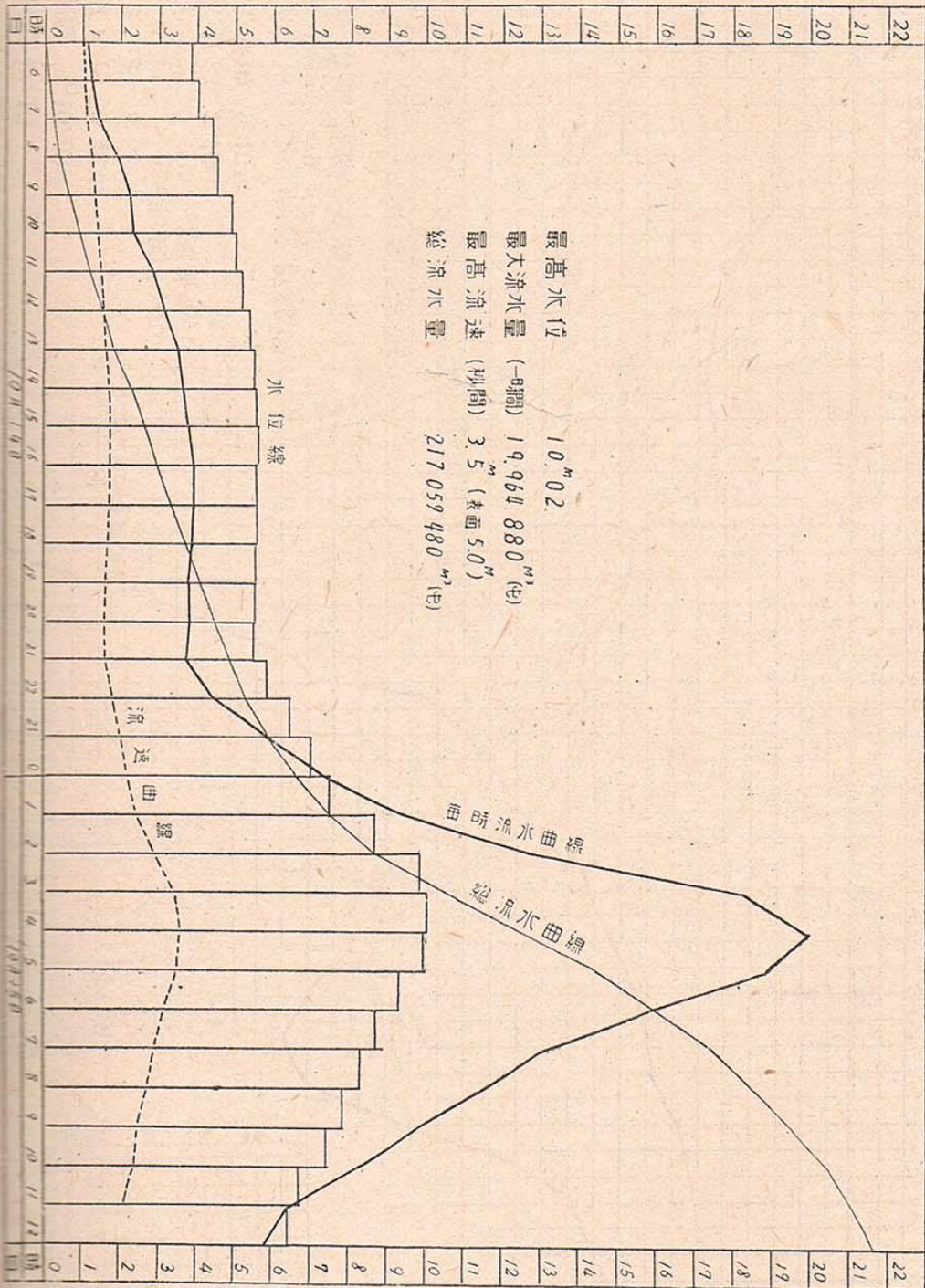
※昭和20年9. 18日頃連続雨量 2784mmにして推定水位9. 40M位らしいとの事、詳細は記録なきを不明



**岩国市の気象特徴** 北と西に山を負い、東と南には瀬戸内海を控えているため、冬季は北西の寒風を防ぎ、夏は東南の暖風をうけ、気候は温暖なり、春秋晴天の際、錦川峡谷に発生する霧は川面に沿って流れ錦帯橋の下で消える、又曇天の際には雲が西北(山)に走れば雨となり、東(沖)に走れば晴れとなる。

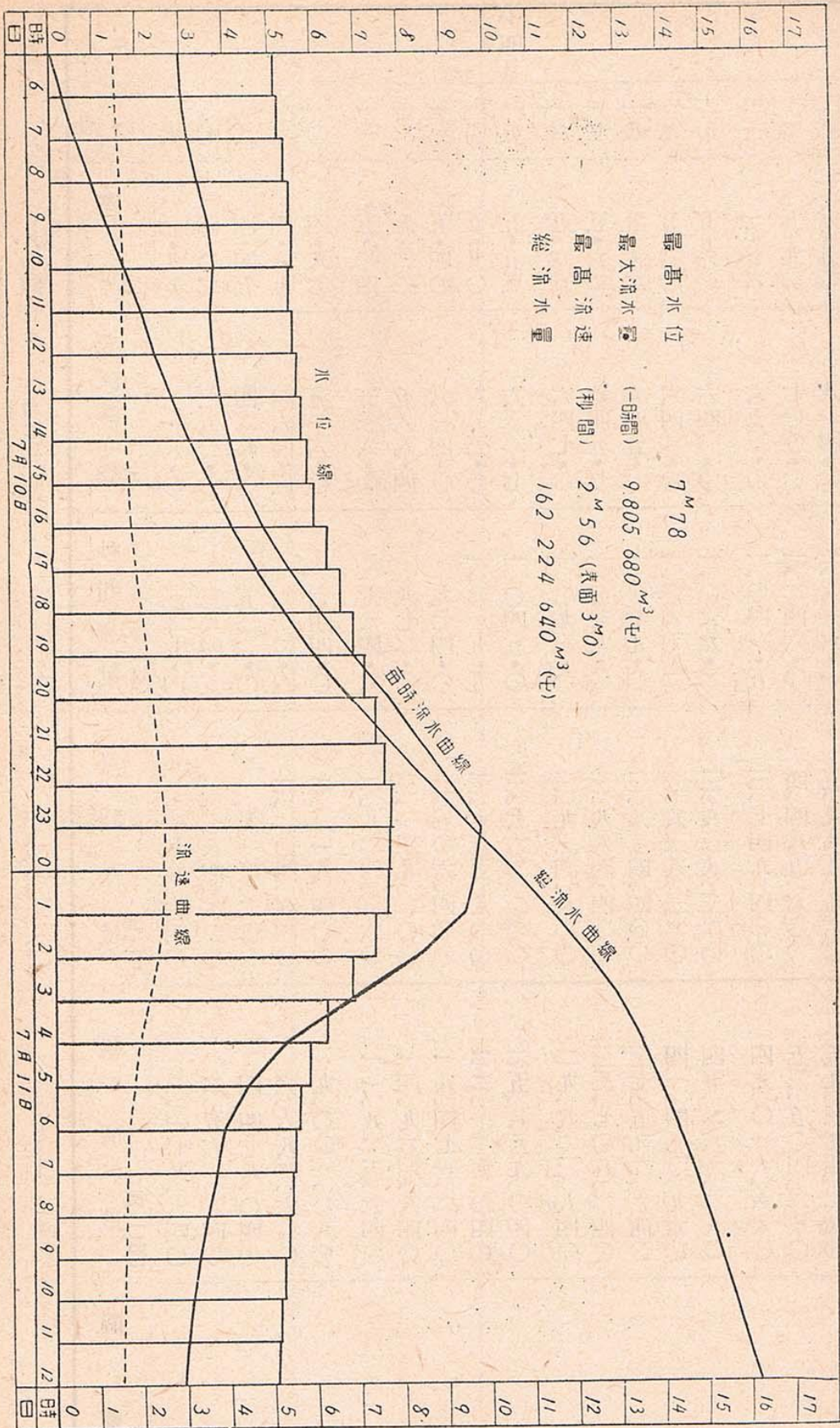


錦帶橋下水位流量等曲線 其一  
 (昭和26年10月14日 2台取計時)



綿帶橋下水位流量變遷曲線 其二

(昭和26年7月10日洪水當時)



錦帶橋下水位、流量一覽 (其一)

(昭和二十六年一月一日四日ルース台風當時)

日	時	水位 M	河床断面積 M <sup>2</sup>	秒間流量 M <sup>3</sup> /sec	每時流量 M <sup>3</sup> /h	總流量 M <sup>3</sup> (計)	摘要
十四日	一五	五・五五	六三二・七	一、〇四五・〇	三、七六二、〇〇〇	二五、八八九、〇四〇	
	一四	五・五〇	六二三・〇	一、〇一五・五	三、六五五、八〇〇	二二、一二七、〇四〇	
	一三	五・四〇	六〇四・〇	九七四・〇	三、五〇六、四〇〇	一八、四七一、二四〇	
	一二	五・二三	五六八・四	八七二・〇	三、一三九、二〇〇	一四、九六四、八四〇	
	一一	五・〇四	五三六・〇	七八四・六	二、八二四、五六〇	一一、八二五、六四〇	
	一〇	四・八七	五〇六・〇	六四四・〇	二、三一八、四〇〇	九、〇〇一、〇八〇	
	〇九	四・六五	四六四・五	六一二・四	二、二〇四、六四〇	六、六八二、六八〇	
	〇八	四・四五	四二八・〇	五三二・〇	一、九一五、二〇〇	四、四七八、〇四〇	
	〇七	四・〇二	三五〇・〇	三八四・五	一、三八四、二〇〇	二、五六二、八四〇	
	〇六	三・八五	三一八・〇	三二七・四	一、一七八、六四〇	一、一七八、六四〇	
	〇五	七・五〇	一、〇八〇・〇	二、六〇二・八	九、三七〇、〇八〇	七六、一二八、四八〇	
	〇四	七・〇五	九一七・三	二、〇四五・六	七、三六四、一六〇	六六、七五八、四〇〇	
	〇三	六・五〇	八一四・〇	一、六三六・一	五、八八九、九六〇	五九、三九四、二四〇	
	〇二	五・九〇	七〇〇・〇	一、二四六・〇	四、四八五、六〇〇	五三、五〇四、二八〇	
	〇一	五・五六	六三三・〇	一、〇四一・五	三、七四九、四〇〇	四九、〇一八、六八〇	
	〇〇	五・六〇	六四二・〇	一、〇六六・二	三、八三八、三二〇	四五、二六九、二八〇	
	一九	五・六〇	六四二・〇	一、〇六六・二	三、八三八、三二〇	四一、四三〇、九六〇	
	一八	五・六二	六四五・七	一、〇七九・〇	三、八八四、四〇〇	三七、五九二、六四〇	
	一七	五・六二	六四五・七	一、〇七九・〇	三、八八四、四〇〇	三三、七〇八、二四〇	
	一六	五・六三	六四七・〇	一、〇九三・〇	三、九三四、八〇〇	二九、八二三、八四〇	

○印は期間中の最高を示す

錦帯橋下水位、流水量一覽 (其二)

(昭和二六年七月一日洪水當時)

時 日	日 時	水位 M	河床断面積 M <sup>2</sup>	秒間流量 M <sup>3</sup> /sec	每時流量 M <sup>3</sup> /h	總流量 M <sup>3</sup> (噸)	摘要
二	三	八・七〇	一、二四七・〇	三、六〇一・八	一二、九六六、四八〇	八九、〇九四、九六〇	
三	二	九・九〇	一、四八三・〇	五、一一六・四	一八、四一九、〇四〇	一〇七、五一四、〇〇〇	
四	一	一〇・〇二	一、五八〇・〇	五、五四五・八	一九、九六四、八八〇	一二七、四七八、八八〇	
五	〇	九・九六	一、五〇二・〇	五、二二七・〇	一八、八一七、二〇〇	一四六、二九六、〇八〇	
六	九	九・三五	一、三七三・〇	四、三八一・八	一五、七七四、四八〇	一六二、〇七〇、五六〇	
七	八	八・七一	一、二四七・〇	三、六一六・三	一三、〇一八、六八〇	一七五、〇八九、二四〇	
八	七	八・三〇	一、一六六・五	三、一九六・二	一一、五〇六、三二〇	一八六、五九五、五六〇	
九	六	七・八五	一、〇七六・四	二、七二三・三	九、八〇三、八八〇	一九六、三九九、四四〇	
一〇	五	七・四〇	九八八・〇	二、三四一・六	八、四二九、七六〇	二〇四、八二九、二〇〇	
一一	四	六・七〇	八五二・三	一、七八一・三	六、四一二、六八〇	二一一、二四一、八八〇	
一二	三	六・四〇	七九五・〇	一、六一六・〇	五、八一七、六〇〇	二一七、〇五九、四八〇	
一	二	五・四九	六二〇・五	一、〇一一・四	三、六四一、〇四〇	二一〇、七〇〇、三六〇	
二	一	五・一六	五六〇・〇	八四五・六	三、〇四四、一六〇	三、〇四四、一六〇	
三	〇	五・二四	五七四・〇	八八四・〇	三、一八二、四〇〇	六、二二六、五六〇	
四	九	五・三七	五九八・〇	九五〇・八	三、四二二、八八〇	九、六四九、四四〇	
五	八	五・五〇	六二三・〇	一、〇一五・五	三、六五五、八〇〇	一三、三〇五、二四〇	
六	七	五・五四	六三二・〇	一、〇四二・八	三、七五四、〇八〇	一七、〇五九、三二〇	
七	六	五・四九	六二〇・五	一、〇一一・四	三、六四一、〇四〇	二一〇、七〇〇、三六〇	

十五日  
 一、二四七・〇  
 一、四八三・〇  
 一、五八〇・〇  
 一、五〇二・〇  
 一、三七三・〇  
 一、二四七・〇  
 一、一六六・五  
 一、〇七六・四  
 九八八・〇  
 八五二・三  
 七九五・〇  
 三、六〇一・八  
 五、一一六・四  
 五、五四五・八  
 五、二二七・〇  
 四、三八一・八  
 三、六一六・三  
 三、一九六・二  
 二、七二三・三  
 二、三四一・六  
 一、七八一・三  
 一、六一六・〇  
 一二、九六六、四八〇  
 一八、四一九、〇四〇  
 一九、九六四、八八〇  
 一八、八一七、二〇〇  
 一五、七七四、四八〇  
 一三、〇一八、六八〇  
 一一、五〇六、三二〇  
 九、八〇三、八八〇  
 八、四二九、七六〇  
 六、四一二、六八〇  
 五、八一七、六〇〇  
 八九、〇九四、九六〇  
 一〇七、五一四、〇〇〇  
 一二七、四七八、八八〇  
 一四六、二九六、〇八〇  
 一六二、〇七〇、五六〇  
 一七五、〇八九、二四〇  
 一八六、五九五、五六〇  
 一九六、三九九、四四〇  
 二〇四、八二九、二〇〇  
 二一一、二四一、八八〇  
 二一七、〇五九、四八〇  
 二一〇、七〇〇、三六〇







## 二、橋体振動試験の実施

設計が原型通りであり、組立が如何に立派であつても、出来上つた拱橋が力学上完全なものであるかどうか、又荷重に對しどれだけの安全性を持つてゐるかということは過去に於いては未だ一度も試験が行われたことは無かつた。今回竣工を機にこの試験が行われたということは錦帯橋の構造に関する科学的調査研究に好個の資料を提供したものととして重視されるべきであらう。

新しい錦帯橋の橋体が旧橋の場合よりも、より強靱性を持ち、振動もより少いことは吾々関係者として感得しており、その設計が力学上適切以上のものであることは、青木、佐藤両博士の証言によつて諒承してゐるが、今回の試験によつて斯うした優秀性が裏付けられたことは大きな喜びであつた。

今回の試験は橋体の上下、左右の振動試験を主にしたものでその実施要領は次の通り

- 一、日 時 昭和二十八年三月十三日正午より午後三時三十分迄
- 一、天 候 晴曇相半し、時々北の風あり（風速五米前後）
- 一、施行箇所 中央拱橋、但し第二橋に重点を置く
- 一、施行者 青木楠男博士、佐藤武夫博士

助手

早稲大学講師窪田吾郎、助教授平島政吉、同大学院学生北川衛男、同津野和男、錦帯橋建設局職員野村保、同森岡義則、同水野昭夫

- 一、実験要員 岩国市役所職員 六十一名

尙試験方法及び結果についての詳細は青木博士編纂になる「橋体の強度及び振動試験報告書」（復古館保存）参照

### 三、炬火籠の新設

錦帯橋は道路橋であるから何等かの照明設備がないと通行に支障がある。かつては橋上に電柱をおき電灯による照明を行ったことがあるが風致上感心しないので取止めとなった。又錦帯橋祭が催された際全橋をイルミネーションにより賑わしたこともある。然し一面錦帯橋は名勝であるから唯橋上を照明すればそれで良いという訳のものではなく、矢張り古典的な風趣を添えることを主眼とすることが望ましい。

今回の再建工事に当っては此の点を考慮し先づ橋上（橋体）照明用としては工事中に使用した兩岸四個の灯光器をその儘残置して適宜之を活用することによって橋上に照明装置を設けずして充分効果を發揮し得る途を講じた。又名橋にふさわしい風雅な照明としては松明が最も適しているところから新に鉄製の炬火籠を製作し橋脚の先端に取付けることとした。

この炬火籠は建設局に於いて設計（担任中村正男）し、錦帯橋工事用残材を主材とし経費十万円（一基二万五千円四基分）を以って、錦帯橋建設鉄工会（代表梶川岩雄）に製作せせしめた。製品は昭和二十八年四月二十三日納入、同二十五日一基のみ試験的に橋脚上に据付け、点火を行い成績良好であったので、五月二日及び三日の完工式当日は四基据付、夜の観客に驚異の目を見張らしめ橋を賑わした。

此の炬火籠の使用には運搬、取付、撤去、松明の点火及び補給等の労務に人夫二人を要すること、松明は概ね一時間二束を目標とすること、万一の場合を考慮し消火用水を各橋脚毎に用意しておくこと等の諸点に留意しなければならぬ。

（註）此の炬火籠は橋脚の両側（即ち現在の二倍）に装置することにしてはとの要求があった。今回は試験的の意味で一応取付けたもので勿論将来増備されることに異存はない。

### 四、再建記念碑の設置

従来錦帯橋の架替工事の際はその都度橋体裏（桁）に關係者の氏名を連記したものを表示して記念とするのを例とした。今回も第二及び第三橋々体裏面中央に架設協同組合及び建設鉄工会の手により取付けられているのがそれである。然し錦帯橋建設について記念碑の設けられたことはないように聞いている。工事關係業者が再建記を橋体又は橋脚に表示することについては建設局は何等関知しなかったが、記念碑の建設は早くから議題となっており、建設局としてもその必要を認めていたので、之が設置は建設局に於いて設計及び施工を担当した。設置に當っては久能市長の意を酌み

(1) 台石は花崗岩、碑石は小型な自然石を用ゆること。

(2) 碑文は正面に「錦帯橋」の三字のみを記し、左右両側には「起工昭和二十六年二月及び竣工昭和二十八年三月」と「施工、設計者岩国市錦帯橋建設局」と刻むこと。

(3) 碑下（碑石後部）には關係者を刻記した銅板（三〇センチ×四〇センチ）を埋設する。

(4) 設置場所は左岸緑地の左端附近とすること。

にして簡素な環境を損わないよう工夫したのである。

此の記念碑の設計は建設局技術吏員中村正男担当、碑文は五橋書道院主岡崎雲山氏に依頼、施工は日野賢とし昭和二十七年十二月二十九日建立した。

埋設した銅板に銘記すべき關係者を如何なる範囲とするかは議論の存するところであったが、慎重審議の結果次の通りとした。

岩国市長、錦帯橋建設局長	久能寅夫
助 役	徳政繁生
同	土肥京一
岩国市議會議長	桑田佐助

專門委員  
前市長  
錦帶橋建設特別委員長  
塩井亮吉

同  
同  
西村茂生

同  
同  
津田彌吉

工事指導  
工学博士  
青木楠男

同  
工学博士  
佐藤武夫

錦帶橋建設局  
局次長、総務課長  
品川資

工務課長  
八賀盛蔵

総務課次長  
美川武

工務課主任技術吏員  
中村正男

同課現場監督技術吏員  
野村保

工事請負  
岩国市土木協会  
代表 日野賢 外十名

錦帶橋架設協同組合  
代表 篠原經一、片倉寅吉 外十八名

錦帶橋建設鉄工会  
代表 梶川岩雄 外九名

資材納入  
セメント  
松金久知、山県政春

木材  
錦帶橋用材調  
代表 藤井宇太郎 外六名

同  
同  
片山嘉一

鉄鋼材  
三泰産業株式会社 岩根文一

銅材  
坂根産業株式会社

防腐剤（P・C・P）注入加工 東洋木材防腐株式会社  
 尚別の銅板には錦帯橋再建工事に最も関係深く終始敢闘し且現職にある人々の氏名を次の如く銘記し同時に追加埋設した。

市長、錦帯橋建設局長	久能寅夫
助 役	徳政繁生
工学博士	青木楠男
同	佐藤武夫
錦帯橋建設局次長	品川資
同 工務課長	八賀盛蔵
同 総務課次長	美川武
同 主任技術者	中村正男
現場監督員	野村保
同	森岡義則
同	水野昭夫
事務員	藤川武男
同	柳川寿之
同	三戸直行

### 五、錦帯橋の由来と構造記設置

錦帯橋の由来と構造に関する揭示板は従来も岩国保壽会により現在設置ヶ所と略同一地点に設けられ、外來客への良

案内指標となっていた。然し由来はとに角、その構造には従来よりも相当改善が加えられているので昔の儘に表示する訳には行かないし、用材も腐朽して用をなさない。仍て橋の再建を機会に内容にも再検討を加え新鮮味のある由来及び構造記を掲出することにした。

此の由来と構造記の設置は市の商工観光課に於いて担当したのであるが、記事の原案は錦帯橋建設局に於いて作成し、手島岩国保勝会長、永田新之允前市長に協議、田島商工観光課長を経て市長の裁定を得、掲示されるに至ったのである。

掲示用材は錦帯橋再建用材の残材（樺、檜）を以って普通りの設計により篠原経一外数名の請負で昭和二十八年一月三十日建植、記文は市の教育委員会、社会教育課長南部正己氏の執筆である。

## 六、槍倒松の終焉

名勝錦帯橋と共に知られ、錦帯橋にえも云われぬ風情を添えていた槍倒松が主人の死に殉じた忠僕のように錦帯橋の再建を待たず、昭和二十七年夏枯死してしまった。誠に寂しい気がするのである。

徳川幕府時代参勤交代の為九州方面より江戸に往復する諸大名の行列は錦帯橋の御厄介になるのを通例とした。往時岩国藩の番所は横山側の取付きにあったが、当時斯うした行列が他藩の要所前を通過するときには槍を倒して挨拶をするのが礼とされていたに不拘岩国藩を六万石の小藩と軽蔑して大藩の行列は槍を倒して通らない。そこで岩国藩では何とかして槍を倒さしてやらねばならぬと考えた揚句路上を蔽うように此の松を植え、否でも応でも槍を倒さねば通れないように仕向けて溜飲を下げたと云い伝えられた。此の由緒ある老松は十数年前にも一度枯死症状が現われ、宮崎大学教授農学博士中島茂氏の手当により回甦したことがある。

今回枯死の原因が錦帯橋の工事に在るが如く主張する人もある。即ち錦帯橋右岸地区の工事で発破をかけ、地中の振動

老細毛根が切断され栄養不良を誘致したといふのである。勿論老樹ともなれば僅少の故障が意外の大きな影響を与えることもあるので吾々素人には、とやかう断定したことを云う訳にもゆかないが、筆者よりすれば此の枯死の原因は錦帯橋の工事というよりも十数年前の堤防工事で根元が深く埋没した為に衰弱している所に二十六年十月のルース台風による洪水で長時間軀体が水没したことが衰弱に拍車をかけ、愈々抵抗力を失い更にそれにつけこんだ害虫の作用により遂に枯死に迄立至つたものと推察するのである。

という訳は、如何に発破が大きくとも錦見側（左岸地区）の工事によつて毛根が切断されることは想像出来ない。影響ありとすれば第三号、四号橋脚右岸橋台井筒沈下の際行つた発破による振動か、右岸橋台（横山側）の為の階段取除及び掘り下げによる一部毛根の露出ということになるであろうが、之等は総て昭和二十六年の暮から二十七年春に亘つて行われたものであるに拘わらず筆者が檜倒松の異状を発見し保勝会長に連絡したのは二十六年秋（十一月月上旬）のことであつた。

起死回生の手当はそれから繰返された。最初は保勝会でも落葉の季節ではあるし、大したことはあるまいといふことであつたが、その中少し疑しくなつて来たので早速中島博士の出張を乞ひ診断をして貰うことになつた。

(1) 昭和二十六年十二月中旬同博士来岩、種々状況調査の結果この枯状原因は「かひがら虫」の害によるものと判定され被害を受けている小枝を切断焼却すると共に駆虫剤を撒布した。

(2) その後依然病状は悪化し「檜倒松危し」の感を抱かしむる程に枯状顯著となつた。二十七年四月上旬再度同博士の来診を求めたところ、博士は「大体此の松の寿命は私には判つていた。既に老衰も甚だしく水分の吸収力も悪いから、最も効果的な硫酸第二鉄の注入も見込薄で早晚枯死は免れない。速かに後継の松を物色しておいた方が良好」とのことであつた。いわば医師に見離された病状であつた。

(3) 昭和二十七年四月二十二日回生祈願祭を執行して酒一斗、たこの香汁を手へ、一時は小衰を保つていたかに見えたが



六月中旬には最早絶望と見らるるに至り、各新聞紙上に檜倒松臨終近しと喧伝せられた。

(4) 偶々六月二十七日山口県林業指導課技官笠井定雄氏来岩、岩国市役所の農林水産課、県玻璃地方事務所林産関係官と協力して、枯死の原因究明の上最後の手段として、(一)枯死の枝を徹底的に切取る、(二)硫酸第二鉄の注入、(三)B・H・C殺虫剤の撒布、(四)人糞施肥、(五)軀体への粘土被覆等綜合手当を加えた医師のカンフル注射である。

斯うして凡ゆる手当を実施した効もなく、七、八月の炎天続きには抗し得る術もなく、九月中旬遂に切倒しの式を行い茲に岩国市民は勿論観光客に多年親しまれた老松「檜倒松」も錦帯橋と共に三百年の歴史を閉ぢたのである。

今はなき老松を回想するよすがにもと、その跡に若松が臨時に植えてあるが、かつての麗容をしのび得ない寂しさを如何にせん。

## 七、「巖流ゆかりの柳」の設置

佐々木巖流と岩国との関係については曖昧模糊として掴みどころがない。従って岩国の生れか、在住したかも判然としない。佐々木巖流と岩国との関係については少くとも現在のところ岩国の如何なる古文書にも記録がない、唯吾々は幼時から佐々木巖流が錦帯橋畔で剣術を学び所謂「燕返しの術」をのみ出したという意味のことを古老から一片の伝説として聞かされていたに過ぎなかった。文献によれば吉川英治著「宮本武蔵」に巖流の生国は周防岩国であるように書いてあり浪曲や講談でも巖流と錦帯橋とを結びつけた一節を見聞した。又平和百科大辞典には「佐々木小次郎巖流（又は岸柳）の生国は新潟ともいい、又毛利藩のものだとも云われ久三郎と称したこともあるという」とあり、確証はない実状である。

一部には、(一)斯うした明確な証拠のないことと、(二)佐々木巖流は錦帯橋架設前に死んでいるから吉川英治著「宮本武蔵」にある錦帯橋畔で燕を斬った云々とあるのは偽りであることを以って巖流は岩国と何等の繋がりはないと断定するものもある。成程下関図書館の調査によっても佐々木小次郎が巖流島に於いて宮本武蔵の一撃に斃れたのは慶長十七年四月十二

日（西曆一、六二二年、新曆の五月二十四日）……村上元三作映画「佐々木小次郎」にもそれを首肯さすものあり……であり錦帯橋の創建は延宝元年（西曆一、六七三年）のことであるから、その間相当時間的にズレがあることは事実である。然しながら佐々木巖流も宮本武蔵との真劔勝負によって始めてその名を知られるようになり、それ迄は一介の浪人剣士か、無名の剣客に過ぎなかつたであろうから前述の如き彼に関する記録のないという事由のみで巖流と岩国との間に何の關係もないと断定することは早計であろう。

巖流ゆかりの柳設定の緣由 第一、第二橋が完成してから外来客は漸増の傾向にあつた。建設局の工事監督員は之等外来客より「巖流ゆかりの柳が錦帯橋畔にあるということであるが、何処にあるか」との質問を受け返事に困っていることが屢々であつた処へ、錦帯橋再建工事の写真及び説明資料蒐集の爲建設局に來訪した毎日新聞西部本社写真部の津川政二郎氏より「佐々木巖流ゆかりの柳を撮影しておきたいから案内して呉れ」との要求が出て吾々関係者は全く当惑せざるを得なかつた。というよりも巖流ゆかりの柳というものが、これ程人口に膾炙されているとは夢想だにしていなかったの  
で實際驚かされたのである。最早こうなつて來れば仮令事實でないにしても岩国としてはその伝説を生かして観光客を慰める何等かの措置をとる必要があるのではあるまいか。と思つている矢先に橋畔の名物檜倒松が枯死、工事場附近より樹齡數百年を経過したと思われる柳の古木が発見されるといつたような経緯から、建設局は此の巖流のゆかりの柳を設置する計画を進めた。即ち巖流と岩国に関する文獻の蒐集調査を実施すると共に設置の場所、設計につき研討を加え、設置について保勝会その他關係方面の意見を徴したのである。

その結果昭和二十八年四月中旬設置に関する具体案が出来上つたので久能市長の承認を得、五月四日現在地（往時の通路脇）への設置工事を完了した。揭示する由緒書詞文は筆者の作、執筆は建設局囑託藤川武男、設計施工監督は局主任技術者中村正男である。

由緒書について 由緒書の表現をどうするかということについては種々討議されそののであるが、その要として、

(一) 吉川美治著「宮本武蔵」の内容に合致せしめること。

(二) 但し巖流の在住(?) 当時は錦帯橋は未だ架設されていなかったもので文面は錦帯橋という詞は明示しないこと。

(三) 岩国在住の史実不明確であるから断定的な言辞を用いないことを考慮した。

吉川英治の「宮本武蔵」第二巻火の巻、美少年の項に美少年即ち佐々木小次郎と一旅修業者との会話がある。その一節に美少年「私は鐘巻自齊という人について剣を学んでいたが、母が死去しましたので帰国しました。」

旅修業者一生国は何処か」

美少年「国は周防岩国の産です。で私は帰国した後も毎日錬磨を怠らずに錦帯橋畔へ出て燕を斬り柳を斬り独り工夫をやっていました。母が亡くなります際に伝来の家の宝ぞ、大事に持てといわれて呉れました此の長光の刀を以って」というのがあるが、この一節を取入れ次の由緒書をものしたのである。

#### 巖流ゆかりの柳

佐々木巖流小次郎は宮本武蔵との真劔勝負に敗れましたが彼独得の所謂「燕返し」の劔法は天下無双であったということです。

此の老柳は劔豪巖流(当初は岸柳と称す)が少年の折毎日橋畔に出て母より授けた家伝の名刀長光(一名物干竿)を以って燕を斬り柳を斬り、錬磨を怠らず、後年遂に「燕返し」の術を編み出したゆかりの柳と云われて居ります。

昭和二十七年五月十日及び十一月頃の新聞やラジオで「錦帯橋畔に一名所生る」と喧伝されて見ると、聊か面映い感がないではなかったが、いつかは槍倒松に代る真の名所ともなれば、観光客の旅情を多少共慰めるよすがとなり、あなたち罪悪視されることもあるまいと思うのである。

それにしても、こうした新しい施設をそのままに放置しておいては自ら世人に忘却され、果ては鳥獣の巢窟となるのが落である。毎年巖流斃死の日を卜して慰霊祭を行うとか、適当な賑う行事を案出して人を集めその存在を周知せしむることが肝要と思われる。